

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語

メタデータ	言語: 出版者: 日本東洋文化論集 公開日: 2012-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa, 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24915

沖縄県名護市幸喜方言の擬声擬態語

かりまた しげひさ

1. 幸喜方言の擬声擬態語

沖縄島北部の名護市幸喜集落の方言（以下、幸喜方言¹）にも実際の音をまねて動きや状態のようすをあらわしたり、動きや状態のようすを音の感じであらわしたりする擬声擬態語とよばれる一群の単語が存在する。幸喜方言の擬声擬態語は、主として述語になる動詞を修飾し、述語のあらわす動作、変化、動き、状態のありさまをあらわす。擬声擬態語は、形態論的には語形変化のシステムをもたず、構文機能的には連用修飾語として述語を修飾する。形態論的な特徴と構文機能的な特徴を重視すると、幸喜方言の擬声擬態語は副詞に分類される。

幸喜方言の擬声擬態語は、実際の音をまねて動きや状態のようすをあらわす擬声語や擬音語、動きや状態のようすを音の感じであらわす擬態語、擬情語に下位区分することも可能である。典型的なばあいには容易に区別できるが、どちらかあいまいなものもすくなくなく、1個の単語の多義的な意味として擬音語的な意味と擬態語的な意味が共存する単語もあって、分別が容易ではないばあいがある。本稿では擬声擬態語として一括してよぶ。

2. 副詞の文法的な形式

副詞は、連用修飾語としてしか機能しない、構文機能的に単純な品詞である。副詞は、文のなかで主語、補語、状況語として機能する名詞のような格＝とりたての体系をもたず、曲用しない。動作や変化や状態など動的な意味をあらわ

¹ 本稿で使用する資料は、2000年4月から2011年9月27日までの期間に行なった幸喜方言辞典作成のための調査で得られたものである。2011年9月27日で441回の調査を行ない、なお継続中である。話者は幸喜集落在住のM.Y. (1916年生、女性)、M.H. (1920年生、女性)。いずれも幸喜生まれ育ち。両親も配偶者も幸喜出身者。

しながら述語として機能する動詞のようにテンス・アスペクト・ムード、ヴォイスなどの文法的なカテゴリをもたず、活用しない。語形変化しない副詞の形態論的な特徴は構文機能的な特徴と相関している。副詞は、文法的に（形態論的）に無定形amorphousな品詞といわれるのはそのためである。

しかし、擬声擬態語をふくめた副詞が語彙的な意味を有して文のなかで文法的な役割をもって機能するものであるならば、副詞の語彙的な意味の存在形式としての文法的な形とはどんなものだろう。新川忠1974は、副詞の文法的な形を次のようにのべる。

副詞はおもに動詞や形容詞とくみあわさって、一定のむすびつきをつくりながら、その中でみずからの機能をはたしている。文の構造の中では一定の位置をしめている。副詞のつくりだすむすびつき、その中での機能、文の中での副詞の位置などは、名詞や動詞や形容詞などのそれとくらべて、あきらかにことなっていて、それらが副詞を文法的に特徴づける。つまり、構文論的な観点からみるならば、副詞はまちがいなく文法的にかたちづけられていて、その点で名詞や動詞や形容詞、あるいは、陳述詞とはことなっているのである。

擬声擬態語も形態論的には形づけられないが、構文機能的には述語のまえにおかれて連用修飾語として述語を規定し、動詞とのあいだで連語論的なむすびつきをつくって動作、変化、動き、状態の様態や結果的な状態をあらわす。この連語論的なむすびつきと構文論的な機能が擬声擬態語の語彙的な意味の存在形式としての文法的な形である。

3 幸喜方言の擬声擬態語の音声形式

幸喜方言の擬声擬態語を形のうえからみると、重複形とひとえ形におおきくわかる。擬声擬態語からつくられた複合動詞と派生動詞の第二中止形が連用修飾語として述語をかざり、副詞化したものがある。

1. はだかの重複形
2. 部分重複形
3. tuを後接させた重複形
4. はだかのひとえ形
5. tʃiを後接させたひとえ形
6. naiを後接させたひとえ形
7. ʃiを後接させた重複形
8. 接尾辞-mikatʃi, -makatʃiを後接させたひとえ形

3.1 はだかの重複形

はだかの重複形は、幸喜方言の擬声擬態語の基本となるタイプで、3、6、7のタイプのもとになっている。様態副詞、結果副詞の両方にあらわれる。このタイプは、かざられの動詞のあらゆる動作・変化が継続するさま、多回につづくさま、状態の程度がおおきいことを含意してあらわすものがおおい。

音節構造からみると、1音節1モーラの短音節をふたつかさねるCVCV型、長母音を含む1音節2モーラの音節をかさねるCV:CV:型、撥音をふくむ1音節2モーラの音節をかさねるCVNVCVN型がおおい。そのほかに、数はすくないが、促音をふくむ2音節3モーラの音節をかさねるCVQCVCVQCV型、促音と撥音をふくむ2音節4モーラの音節をふくむCVQCVNVCVQCVN型などがみられる。

1音節1モーラの短音節CVをふたつかさねるCVCV型には、mutamuta（ワイワイ）、pakupaku（プカプカ）、ʃikaʃika（オドオド）、piʃipiʃi（ヒリヒリ、ズキズキ）、putuputu（ブルブル）などがある。

- 1) tawaku pakupaku pukutu kusahaN.
（タバコを スパSPA 吸うので 臭い。）
- 2) dugeriti ti: ka: padʒi piʃipiʃi jamuN.
（転んで 手の 皮を 剥いで ヒリヒリ 痛む。）

3) tamunu patfipatfi u:ti me:suN.

(薪を ボキボキ 折って 燃やす。)

4) ?arija juru: niNtuti pa: gifigifi narasuN.

(あいつは 夜 寝ていて 歯を キリキリ 鳴らす。)

長母音を含む1音節2モーラの音節CV:をかさねる型には、ba:ba: (ぼさぼさ)、ka:ka: (かーつと)、we:we: (ウエーン)、pi:pi: (ピーピー)、gi:gi: (ギーギー)、ga:ga: (ガーガー) などがみられる。

5) haradzi ba:ba: natutu ?aNda: fikire:.

(髪が ぼさぼさに なっているから 油を つける。)

6) garasaga ga:ga: mugeisuga nu: egaja:.

(カラスが ガーガー 騒ぐが 何だろう。)

撥音をふくむ1音節2モーラの音節CVNをかさねる型には、tʃoNtʃoN (ポタポタ)、paNpaN (パンパン)、koNkoN (ぐうぐう)、kwaNkwaN (凜と) などがある。

7) patagafira tatiNditfi tʃidzimi gwaNgwaN narasuN.

(旗頭を 立てようと 太鼓を ドンドン 鳴らしている。)

その他に、1音節1モーラの短音節CVをみつかさねる型、促音をふくむ2音節3モーラの音節CVQCVをかさねる型、撥音をふくむ3音節3モーラの音節CV CVNをかさねる型、促音と撥音をふくむ2音節4モーラの音節CVQCVNをかさねる型などがあるが、いずれも語例はおおくない。

pikarapikara (びかびか)、dziQtadzQiQta (びっしより)

potoNpotoN (ポタポタ)、kereNkereN (ちりんちりん)

paQtaNpaQtaN (パタンパタン・機織の音)

- 8) ?aQtani ?ami puti kinuga dʒiQtadʒiQta di:tuN
 (急に 雨が 降って 服が ぐしょぐしょに 濡れている。)
- 9) pukuginu mi: potoNpotoN utiN.
 (フクギの 実が ポタポタ 落ちる。)
- 10) wakahanija paQtaNpaQtaN nunu ?utaN.
 (若いころは パタンパタン 布を 織った。)

3.2 はだかの部分重複形

重複する形式の一部の子音か母音、あるいは音節に変異のみられるタイプである。フォネーム1個、あるいは音節1個を変更したタイプと2箇所フォネームを変更したタイプ、ことなる重複形をならべたタイプがある。

gi:guiha:gui (ぶつくさ)、saNdʒaNkuNdʒaN (さんざんに)、fikamuga (おどおど)、?a:ba:sa:ba: (ペチャクチャ)、nuruNturuN (ポーッと)、piriNparaN (ペラペラ)

- 11) ?anu tʃu:ja gi:guiha:gui ?awiN.
 (あの 人は ぶつくさ 不平をいう。)

tʃiritʃiribarabara (ちりちりばらばら) ki:ki:ka:ka: (ちくちく)、teNteNpatʃipatʃi (テンテンパチパチ・綿打ちの音) は、重複形をふたつ重ねたもので、前半部だけでも、あるいは後半部だけでも使用可能である。

- 12) ?inuga hakadziti tʃu:ja tʃiritʃiribarabara natuN.
 (犬が あさって 今日 (のごみ) は ちりちりばらばらに なっている。)
- 13) ?inuga hakadziti tʃu:ja tʃiritʃiri natuN.
 (犬が あさって 今日 (のごみ) は ちりちりに なっている。)
- 14) ?inuga hakadziti tʃu:ja barabara natuN.
 (犬が あさって 今日 (のごみ) は ばらばらに なっている。)

- 15) nudini gi: hakati ki:ki:ka:ka: suN.
 (のどに 棘が かかって ちくちく する。)
- 16) nudini gi: hakati ki:ki: su:tu ka:ka: fe:.
 (のどに 棘が かかって ちくちく するから かーかー しろ (息を強く吐け。))

3.3 tuを後接させた重複形

重複形に接辞tuを後接したbutebute:tu (でっぷりと)、kwaNkwaNtu (凜と)と、ひとえ形に接辞tuを後接したguQtatu (ぐったりと)、suputu (ぐっしより)とのふたつのタイプがみられる。重複形に接辞tuを後接したものは、はだかの重複形とつかわれ方やそのあらわす文法的な意味がほぼおなじである。現在までのところ結果副詞的な意味をもった擬声擬態語がみられた。接辞tuを後接した類似の構造をもつ副詞として、?aka?aka:tu (赤々と)、naganaga:tu (長々と)のような形容詞派生の結果副詞がある。

- 17) ?anu tfu:ja buNra:hanu kwaNkwaNtu ?aiN.
 (あの 人は 威厳があって 凜と している。)
- 18) ku:ja piQtji: ?itfunahanu utati guQtatu natuN.
 (今日は 一日中 忙しくて 疲れて ぐったり なっている。)

3.4 はだかのひとえ形

この形式のおおくは他音節構造である。baNbara: (がらんと)、gaNgara: (がらんと)、paQtarage: (バタバタ)、tuNtuNteN (チントンシャン)、gu:rakwaQtai (ユラユラ、フラフラ)、gu:rabaQtai (ユラユラ、フラフラ)、hiN (ちーん) など、ひとえ形でしか使用されないものがおおいが、joNna: (ゆっくり)、pu: (プーッと) などかさねて使用できるものもある。

- 19) ja:ja magihasuga do:gu ne:nu baNbara: natuN.
 (家は 大きいが 家具が なくて がらんどうに なっている。)

20) ?anu tfu:ja saki nudi mitfira gu:rakwaQtai aQkuN.

(あの人は酒を飲んで道をフラフラ歩いている。)

3.5 naiを後接させたひとえ形

重複形の前半分のひとえ形に接辞naiをつけたもので、つかわれ方やそのあ
らわす語彙＝文法的な意味は、重複形とほぼおなじである。かざられる動詞の
あらわす動作、変化が継続するさま、多回的につづくさま、状態の程度がおお
きいことなどを含意してあらわす。

mutanai (ワイワイ)、toNnai (トントン)、gatanai (ガタガタ)、pakanai
(ドンドン)、we:nai (ゲエゲエ)、gu:nai (ブウブウ)、supunai (ぐっしょ
り)

21) kadasu buru ge:nai paQtfaN.

(食べたのを全部 ゲーゲー 吐いた。)

22) nu:ga kadara we:nai munu pakuN.

(何を食べたのか、ゲーゲー 食べた物を吐く。)

23) tfa:tfaga tibura: pi:nai narasuN.

(祖父が指笛を ピーピー 鳴らす。)

24) hamadunu pi: paNni me:tuN

(かまどの火が ボウボウと 燃えている。)

25) darugara ja:du toNnai tatakusuga daru jagaja:.

(誰か戸を とんとん 叩いているが 誰だろう。)

26) ?amini di:ti pi:hanu gatanai waNmikuN.

(雨に濡れて寒いので、がたがた ふるえる。)

3.6 ditʃiを後接させたひとえ形

引用をあらわすditʃi (と)を後接したひとえ形の擬声擬態語は、擬声語、
擬音語におおく、様態副詞としてnakuN (泣く、鳴く)、naiN (鳴る)、

wareiN (笑う) など言語活動をあらわす動詞とくみあわさる。この型の変種としてdiの脱落したものがある。このタイプは、～ditfi juN (と言う) とおなじく言語活動の内容を提示するむすびつきとおなじである。内容規定的な関係をつくっている。

gu:ditfi (グーッと)、mo:ditfi (モーと)、poNditfi (ドンと)、(Nga:tfi (オギャーと)、tʃiNpi:ditfi (チンピーと)、ʔihihi:ditfi (ヒヒヒと)、kuQkuru:u:tʃi (コケッコと・雄鶏)、kekere:ke:tʃi (コケッコと・雌鶏)、kiQkiriQki:tʃi (コケッコと)、paQpa:tʃi (パッパート)

27) tarugara wata: gu:ditfi naisuga ja:haru ʔaigaja:.

(誰か 腹が グーッと 鳴っているが 腹が へっているのだろうか。)

28) ʔuʃinu mo:ditfi nakutaN. (牛が モーと 鳴いた。)

29) tʃidʒiminu sukei poNditfi naitaN. (太鼓が 一度 ドンと 鳴った。)

30) nama tatʃikuru etu Nga:tʃi nakuN.

(まだ (生後) 二月だから、おぎゃーと 泣く。)

31) ʔihihi:ditfi wareiN (ヒヒヒと 笑う。)

32) tʃa:maga kiQkiriQki:tʃi nakutu ju: ʔakisa.

(矮鶏が コケッコと 鳴くから 夜が 明けるよ。)

このタイプは、継続時間のみじかい、あるいは、一回の鳴き声や音をあらわすが、gu: (グー)、mo: (モー)、poN (ドン)、(Nga: (オギャー) などの1音節構造の擬声擬態語は、重複形にして、多回的な、あるいは、継続する鳴き声や音をあらわすことができる。

3.7 fi:を後接させた重複形

we:we:ʃi (わんわん)、pi:pi:ʃi (ピーピー) などのように、重複形にfiあるいはfi:を後接させた形がみられる。これははだかの重複形に動詞suNが文法化して合成した複合動詞pa:pa:suN、patʃapatʃasuNの第二中止形が連用修飾

語として動詞を修飾するようになったものである²。

33) ja:nu naha pa:pa:fi pumikutu ja:du fiki?akire:.

(家の 中が むんむん 蒸すので 戸を 開ける。)

34) harigi:ja patʃapatʃa:fi: u:ijassaN. (枯れ木は サクッと 折りやすい。)

35) nu:ga kadara we:we:fi munu: pakuN.

(何を 食べたのか ゲーゲーと 吐く。)

36) gamu takutaku:fi kadakuN.

(ガムを くちゃくちゃ 噛んでいる。)

3. 8 接尾辞-mikatʃiを後接させたひとえ形

擬声擬態語のひとえ形に接尾辞-mikasuNをつけてつくった複合動詞 dusamikasuN、gusumikasunの第二中止形が連用修飾語として動詞を修飾する。-mikatʃiの変種として-makatʃiがある。この形は様態副詞として使用されることがおおく、動作や変化が1回、あるいは持続時間のみじかいありさまをあらわす。

37) ni: ?ubohonu dusamikatʃi ?ututʃa:N.

(荷が 重いので どしんと 落とす。)

38) tamana ta:tʃiNgati gusumikatʃi ki:N.

(キャベツを 二つに ザクッと 切る。)

39) de:kuni sutamakatʃi ki:N. (大根を サクッと 切る。)

40) mi:ni miNtʃau ?iQtʃutu pu:mikatʃi ture:.

(目に ゴミが 入ったから、ふうっと (息を吹いて) 取る。)

41) juhuna munu kadi: ge:mikatʃi pakuN.

(変な ものを たべて ゲーッと 吐く。)

² pa:pa:fi (むんむん)、takutaku:fi (くちゃくちゃ) は複合動詞 pa:pa:sun、tʃoNtʃoNsuNの第二中止形に由来するが、ふたまた述語文の述語ではなく、連用修飾語として述語になる動詞をかざっていて、副詞として機能しているとみる。

42) tʃa:tʃaga tiburati pi:mikafi juuN.

(祖父が 指笛で ピーッと (鳴らして) 呼ぶ。)

43) hamadunu pi: tukiduki paNmakatʃi me:iN

(かまどの 火が ときどき パチッと (弾けて) 燃える。)

4 擬声擬態語の語彙的な意味

幸喜方言の擬声擬態語は、動詞とくみあわせり、発せられる音や動きのイメージによって動詞のさしだす動作、変化、動き、状態の様態や結果的な状態をあらわしながら、回数や持続時間など、さまざまな側面から具体的に特徴づける。

擬声擬態語の語彙的な意味が動詞とのくみあわせのなかで実現することは、多義的な擬声擬態語をみることで理解できる。すなわち、結びつく動詞の語彙=文法的なタイプのちがいが多義的な擬声擬態語の語彙的な意味のちがいになってあらわれる。turuturuは、主体変化動詞ni:buisuN (居眠りする) とくみあわせるとき、結果副詞として結果的な状態をあらわす。主体動作客体変化動詞me:suN (燃やす) とくみあわせるとき、様態副詞として客体にはたらきかけていく様態をあらわす。

44) terebi ma:gatʃi: turuturu ni:buisuN.

(テレビを 見ながら うとうと 居眠りしている。)

45) naNʃiki saNgutu turuturu me:fe:.

(焦げないように とろとろ 燃やせ。)

ba:ba:は、主体動作動詞とくみあわさって自然現象の動きのありさまをあらわす様態副詞としてあらわれ、主体変化動詞とくみあわさって主体変化の結果的な状態をあらわす結果副詞としてあらわれる。

46) hadʒinu ba:ba: pukuN. (風が びゅうびゅう 吹く。)

47) pi:nu ba:ba: me:iN. (火が ぼうぼう 燃える。)

48) haradzi ba:ba: natutu ?aNda: jikire:.
(髪が ぼさぼさに なっているから 油を つける。)

5 擬声擬態語の語彙=文法的な意味

幸喜方言の副詞は、語彙=文法的な意味にしたがって様態副詞、結果副詞、量=程度副詞、時間副詞に下位分類できる。

様態副詞

misuku (丁寧に)、japate:mi (やんわりと)、tʃiradzira:tu (面と向かって)、so:ra:fiku (しっかりと)、naNkuru (ひとりでに)、jiNdziNtu (心から)、joNna: (ゆっくり)

結果副詞

magiku (大きく)、suraku (きれいに)、?ara?ara (大雑把に)、hatagata:tu (密に)、ku:gu:tu (濃く)

程度副詞

saQko: (とても)、de:dzina (たいへん)、tʃu:ku (強く)、jo:ku (弱く)

量副詞

kaQsaN (たくさん)、?upoku (たくさん)、supara (腹いっぱい)、ku:te:mi (少し)

時間副詞

tukiduki (ときどき)、?asanara (朝っぱらから)、?atʃidaN (早速)、jagati (やがて、あやうく)、sutebai (しばらく)、sute: (いつとき)、piQtʃi: (一日中)

擬声擬態語のばあい、様態副詞、結果副詞はみられるが、程度副詞にはsaQko: (とても)があるが、きわめてすくなく、量副詞、時間副詞は確認できていない。擬声擬態語は量や程度を含意させながら様態や結果的な状態をあらわしたり、単語のつくりの方法によって動作の多回性や程度をあらわしたりする。

doNdoN (ドンドン) は、tatakuN (叩く)、?utʃuN (打つ) などの動詞とくみあわさるとき、多回的で小刻みにつづく打撃動作に付随して発生する音を様態としてあらわす様態副詞としてあらわれる。主体動作客体変化動詞 (kamuN食べる等) とくみあわさると、客体にはたらきかける多回的な動作が客体の量的な側面を含意した様態副詞へと移行する。主体動作動詞 (?aQkuN歩く等) とくみあわさると、多回的で小刻みなすばやい動きが強調された様態副詞へと移行する。

49) darugara ja:du doNdoN tatakusuga daru egaja:.

(だれか 戸を どんだん 叩くが 誰だろう。)

50) siwafi mini doNdoNfi ?utʃuN.

(心配で 胸が どんだんと / どきどきと 打つ。)

51) maNdotu doNdoN kame:.

(たくさんあるから どんだん 食べる。)

52) joNna: ?aQkaNgutu doNdoN ?aQke:.

(ゆっくり 歩かずに さっさと 歩け。)

はだかの重複形ba:ba: (びゅうびゅう)、doNdoN (どんだん)、naiを後接したひとえ形mutanai (ワイワイ)、tʃoNnai (ポタポタ) は、具体的な動作の回数が複数であること、動作や変化が一定期間継続すること含意している。

5.1 様態副詞的な擬声擬態語

かざりの擬声擬態語は、述語になる動詞のあらわす動きや変化などのようす、し方を特徴づける。

53) keQsanu tʃu:ga mutamuta sawaguN.

(たくさんの 人が わいわい 騒いでいる。)

54) ?ja: pana pi:pi: narasusuga kadzeru hitʃuNna:.

(君 鼻を ピーピー 鳴らしているが 風邪を ひいているのか。)

- 55) ʔa:ba:sa:ba: ʔimiN wakaraN munuNka ju muN
 (べちゃくちゃ 意味も わからない ことばかり いう)
- 56) pisaga jamura getegete ʔaQkuN.
 (足が 痛いのか ひよこひよこ 歩いている。)
- 57) ʔukaʔuka ʔuNteNʃi:ne ʔabunahatu ki: ʃikiti muQte:.
 (うかうか 運転したら 危ないから 気をつけて 持て。)
- 58) miQkwabi:tʃanu dʒo:ra pi:pi:ʃi natʃi: ʔiQtʃi ki:ne dʒini ʔiQtʃi kuN.
 (ネズミが 門から ピーピーと 鳴いて 入って 来たら 銭が 入ってくる。)
- 59) ʔaNmaga uraNtu we:we:ʃi nakuN.
 (母さんが いないので ウエウエーと 泣く。)
- 60) keQsanu tʃu:ga mutanai sawaguN.
 (たくさんの 人が わいわい 騒いでいる。)
- 61) nu:ga kadara we:nai munu: pakuN.
 (何を 食べたのか ゲーゲー 吐く。)
- 62) ʔamadaimidziga tʃoNtʃoN ʔutiN.
 (雨だれが ぼたぼた 落ちている。)

5.2 結果副詞的な擬声擬態語

結果副詞的な擬声擬態語は、動作や変化によってひきおこされた、主体や客体の質や状態をあらわす。動詞のあらわす動作や変化が原因となってひきおこされた状態を擬声擬態語があらわす。述語になる動詞と連用修飾語の擬声擬態語は結果・原因という関係でむすびついている。

- 63) ʔaQtani ʔami puti kinuga dʒiQtadʒiQta di:tuN
 (急に 雨が 降って 服が ぐしょぐしょに 濡れている。)
- 64) kjaku ʔikirahanu sekiga ga:ga: ʔatʃuN.
 (客が 少なく 席が ガラガラに 空いている。)
- 65) ʔiQta poro: kusaga bo:bo: mi:tutu tagure:.
 (おたくの 畑 草が ぼうぼう 生えているから 引き抜け。)

- 66) ku:nu me:ja sarasara nire:.
 (今日の 飯は 固く 煮る (炊け).)
- 67) ?ubusa:ja kutakuta niriwaru ma:haru.
 (煮物は クタクタに 煮るのが うまい。)
- 68) warainu ?omotʃa saNdʒaNkuNdʒaN ko:tʃi neN.
 (こどもが おもちゃを さんざんに 壊してしまっている)
- 69) ?aQta ja:ja nama pi:pi:ʃi kumatuN.
 (あいつの 家は 今 ピーピー 困っている。)
- 70) ja:nu naha pa:pa:ʃi pumikutu ja:du ʃiki?akire:.
 (家の 中が むっと 蒸すので 戸を 開ける。)
- 71) suputu di:ti ?ikisiru natuN.
 (ぐっしょり 濡れて ずぶ濡れに なっている。)
- 72) ?anu tʃu:ja buNra:hanu kwaNkwaNtu ?aiN.
 (あの 人は 威厳が あって 凜と している。)
- 73) ku:ja piQtʃi: ?itʃunahanu utati guQtatu natuN.
 (今日は 一日中 忙しくて 疲れて ぐったり している。)
- 74) ku:nu dʒu:ʃija midʒiga upohonu boroboro natuN.
 (今日の 雑炊は 水が 多くて 飯は 柔らかく なっている。)

接頭辞?u:- (大)をつけた重複形の擬声擬態語は、述語になる動詞のあらわす動作、結果的な状態のあらわれ方の程度がおおきいことをあらわす。様態副詞的な擬声擬態語も結果副詞的な擬声擬態語も可能である。

- 75) keQsanu tʃu:ga ?u:mutamuta sawaguN.
 (たくさんの 人が わいわい 騒いでいる。)
- 76) keQsanu tʃu:ga ?u:mutamutaʃi sawaguN.
 (たくさんの 人が わいわいと 騒いでいる。)
- 77) ?aminu magisanu ?u:batabata di:tuN.
 (雨が 激しくて ぐっしょり 濡れている。)

78) ʔaminu magisanu ʔu:batanai di:tawaN.

(雨が 激しくて ぐっしょり 濡れてしまった。)

79) bakudaN ʔutiti ʔana: ʔu:ga:ga: natuN.

(爆弾が 落ちて 穴が ぽっかりに なっている。)

6 擬声擬態語からの合成動詞

擬声擬態語をもとに合成した複合動詞baNbaNsuN、doNdoNsuNと派生動詞baNmikasuN、doNmikasuNがある。前者は、baNbaN、doNdoNなどの重複形の擬声擬態語にsuN (する) をくみあわせた複合動詞で、後者はひとえ形の擬声擬態語に接尾辞-mikasuN、-makasuNをつけてつくられた派生動詞である。baNbaNsuN、doNdoNsuNを1単語の複合動詞とみるか、分析的な2単語のあわせ述語とみるか検討が必要であるが、本稿では複合動詞とみて記述をすすめる。

6.1 suNをくみあわせた複合動詞

擬声擬態語とsuN (する) がくみあわさったばあい、擬声擬態語はsuNに対して連用修飾語としてはたらくのではなく、動詞の語彙的な意味の中核をなす要素としてsuN (する) をしたがえている。suNは、文中での複合動詞の機能、アスペクト・テンス・ムードをあらわすが、アスペクトとかかわる複合動詞の語彙=文法的なタイプの決定には擬声擬態語が重要な役割をはたす。81) 84) 90) の例はいずれも、擬声擬態語gasagasaと動詞suN (する) がくみあわさった複合動詞だが、81) は主体動作動詞で、84)は主体動作客体変化動詞で、90) は状態動詞である。

80) weNtʃuga uira gasagasasuN.

(ネズミが いるのか ガサゴソする。)

81) haraguso kamine nudiga pi:ratʃi ka:ka:suN.

(唐辛子を 食べたら 喉が 終らいて カーカーする。)

- 82) ?ujaduiga kuQku:fi: kwa: juuN.
(親鶏が コッコーと鳴いて 雛を 呼ぶ。)
- 83) gasagasasaNgutu humekiti ?arare:.
(がさがさ (荒っぽく) しないで ていねいに 洗え。)
- 84) nunu ?uinija paQtaNpaQtaNsu:taN.
(布を 織るときは パタンパタンした。)
- 85) ?unu de:kini firiFiriFi kamaja.
(その 大根を スリスリして たべようね。)
- 86) ?anu tfu:ja piQtfi: mi: fikafikasuN.
(あの 人は しょっちゅう 目を パチパチする/目くばせする。)
- 87) pana: t?imatutu hiNJe:.
(鼻が 詰まっているから チンしろ/漬をかめ。)
- 88) punuija ?arai waQsatu fina gasagasasuN.
(布海苔は 洗いが 悪いので 砂が ザラザラする。)
- 89) ?ikusa?atunu ?amerikagumija sapesapasuN.
(戦後の 米国产米は パサパサしている。)
- 90) miNtfau ?iQt?atu mi: fikafika:fi: jamuN.
(ゴミが 入ったので 目が チカチカして 痛む。)
- 91) ?afi: pati kinu: fipufipufi: ke:riwaru eru.
(汗を かいて 服が ジトジトして 着かえなければ ならない。)
- 92) ?ukiti t?a:kija mi: tfu:ranu nuruNturuNsuN.
(起きた ばかりのときは 目が 覚めずに ぼんやりしている。)
- 93) hatadza:numine: ?ukaukafi: niNbaraN.
(濃茶を 飲んだら ウカウカして 眠れない。)

6.2 接尾辞-mikasuNをつけた派生動詞

turumikasuN、pat?imikasuNのように語幹の一部にひとえ形の擬声擬態語

turu-, patʃi-をふくみ、接尾辞-mikasuN、-makasuNをつけてつくられる派生動詞がある。

doNmikasuN、patʃimikasuNの第二中止形doNmikatʃi、patʃimikatʃiが述語動詞narasuN（鳴らす）、mi:ʔutʃi: suN（目くばせる）を限定する連用修飾語として機能するとき、これも副詞とみるのがよいとかがえる。

94) pana: tʃimatutu hiNmikaʃe:.

（鼻が 詰まっているから 湧をかめ。）

95) sukei doNmikasawa tu:re:.

（一回 ドンしたら 走れ。）

96) ku:nu me:ja saramakatʃi hupahaN.

（今日の 飯は さらっとして 固い）

97) nudini gi: hakati ki:ki: su:tu ka:mikaʃe:.

（のどに 棘が かかって ちくちくするから かーっとしろ（息を強く吐け。）

98) nama patʃimikasutaʃiga ki:nu judaru u:ritagaja:.

（今 ポキッとしたが 木の 枝が 折れたのだろうか。）

99) mi: patʃimikasu:taʃiga nu:nu ʔe:dʒu etagaja:.

（目を パチッとしたが、 何の 合図だったんだろう。）

先述したように、接尾辞-mikasuNを後接した派生動詞の第二中止形が連用修飾語となって述語をかざる。述語になる動詞のさしだす動作の様態をあらわして、副詞化している。動作が一回、あるいは、持続時間のみじかいことをあらわす様態副詞は、このタイプだけである。

100) sukei doNmikatʃi narasawa tu:re:.

（一回 ドンと 鳴らしたら 走れ。）

101) sukei patʃimikatʃi mi:ʔutʃi: suN.

（一回 パチッと 目くばせ する。）

同一の擬声擬態語にsuNをくみあわせた複合動詞と接尾辞-mikasuNを後接した派生動詞とで語彙=文法的な意味に違いのみられるばあいがある。重複形の擬声擬態語にsuNをくみあわせた複合動詞は無意志的な状態動詞として使用され、ひとえ形の擬声擬態語に接尾辞-mikasuNを後接した派生動詞は意志的な主体動作動詞として使用されている。

102) terebi ma:gatʃi: turuturusutaNmunu ….

(テレビを 見ながら うとうとしていたのに …)

103) wa:ga miQtʃutu tʃumija turumikaʃe:.

(私が 見ているから しばらく 寝ている。)

同じ派生動詞が述語になるばあいでも、主語(主体)が人か物かによって、意志動詞としてもあらわれるし、無意志動詞としてもあらわれる。

104) ti: sukei patʃimikasutaN.

(手を 一度 パチンとした(叩いた)。)

105) ki:nu judanu patʃimikasutaʃiga u:riru sagaja:.

(木の 枝が パチンとしたが、折れたのだろうか。)

ba:ba:は、風が吹くようすをあらわす様態副詞の意味も、髪の毛や草が乱雑に伸びている結果的な状態をあらわす結果副詞の意味もあらわすが、接尾辞-mikasuNが一回、あるいは短時間の運動をあらわす派生動詞を派生させるので、風が勢いよく吹くことをあらわすba:mikasuN(びゅうっと吹く)を派生させることはできるが、火がもえることをあらわす派生動詞を派生することはできない。

106) hadzINU ba:mikatʃi putʃi ja:du baNmikasutaN.

(風が びゅうっと 吹いて 戸を バンと閉めた。)

7 擬声擬態語からの合成名詞

擬声擬態語から合成した幸喜方言の名詞には、擬声擬態語に名詞づくりの接辞a、uなどの接辞をつけた派生名詞と、名詞や形容詞語幹をくみあわせた複合名詞のふたつのタイプがある。

7.1 派生名詞

接辞をつけた派生名詞には、セミや昆虫、鳥のなまえになっているもの、人の性質や特徴をあらわす名詞になっているものなどがある。擬声擬態語をそのまま名詞化したタイプ、語末の母音を長音にして名詞化したタイプ、suN（する）の第一中止形に名詞化接辞aをつけて名詞化したタイプなどがある。

セミや鳥の鳴き声は、その種類ごとにことなり、主体（種）を識別する重要な決め手となることから、その鳴き声をあらわす擬声擬態語からその種をあらわす名詞を派生させている。あるいは、特徴的な動きが目印になって種が区別される動物は、その動きのようすをあらわす擬声擬態語が派生名詞になって名前をあらわすものがある。

ʔa:saNsa: (クマゼミ)、dʒi:wa: (クロイワツクツク)、tʃiNtʃina: (セッカ)、
tʃoQtʃoro: (鶯の幼鳥)、dʒu:mukumuku: (セキレイ)、

人の表情やふるまい、行動のありさまをあらわす擬声擬態語から人の性質や特徴をあらわす名詞を派生させている。このタイプの派生名詞は、主として文の述語にあらわれる。擬声擬態語が連用修飾語になって述語動詞をかざるとき、述語動詞のあらわす動作に固有な一時的な特徴をあらわすのだが、ある特定の個人がくりかえしその動作を行なうと、擬声擬態語のあらわす動作のありさまがその個人の個性として恒常的にあらわれる特性へと移行し、それをあらわす名詞がうまれる。

- 107) ?arija gasagasa: etu ?arinija JimiraN³.
 (あいつは 荒っぽい奴だから あいつには させない。)
- 108) ?arija pa:giFigifisa: etu suwanija niNbaraN.
 (あいつは 齒軋りする奴だから 側には 寝られない。)
- 109) ku:ja getegete sa:ja. (今日は、片足跳び遊びをしようね。)

7.2 複合名詞

擬声擬態語が複合語の前要素になって、複合名詞をつくる。後要素の名詞が濁音化（有声音化）するのは通常の複合名詞と同じ。

turuturubi: (とろ火)、piripirigusu (軟便)、daradara:fi: (ガラガラ仕方)、daradara?ami (ガラガラ降り)、tidekuni?iriri (大根おろし、大根おろし器)、sasarame: (固めの飯)、boroboro?u:fi (水気の多い雑炊)、boroboro?ukeme: (水気の多い粥)

追記：本稿は国立国語研究所委託事業「沖縄における消滅危機方言の調査・保存に関する研究」の研究成果の一部である。

参考文献

- 新川忠 (1974) 「言語学の用語 副詞」『教育国語』38号、pp.124-125、むぎ書房。
- 新川忠 (1979) 「副詞と動詞のくみあわせ」試論『言語の研究』pp.173-202、むぎ書房。
- 新川忠 (1996) 「副詞の意味と機能」『ことばの科学』7号、pp.61-80、むぎ書房。
- 田守育啓、ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味』p.228、くろしお出版。
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』p.325、くろしお出版。

³ このgasagasaは、述語になって主語にさしだされた人 (?ariあいつ) の特性をあらわしているので、派生形容詞とみるべきものだろう。繫詞eN (である) をくみあわせて述語になる第二形容詞に分類される。